



根釧地域における極早生とうもろこしの 無マルチ栽培

＜乳牛用給食センターの新技术：素材のつくり方＞

なぜ、今、根釧で無マルチ栽培か

★冷害対策から、これまで、マルチ栽培が主。

長所： 熟度が安定的、多収
 短所： 環境問題、播種作業が遅い
 マルチフィルム代が高つく

面積増なら
 速い安い
 無マルチ栽培



でも、**極早生品種**が必須で、マルチより**低収**に。

極早生品種でも多収・低コスト

狭畦栽培(畝間を狭くして栽植密度を上げる)で、生育不良年でも**一定以上の収量が得られます。**

播種床を作る際には、**簡易耕起(「ディスクハローのみ」)**が可能です。ただし、草地跡では除草剤で前植生を完全に枯らします。

表. 狭畦無マルチ栽培の収量性

		慣行畦間栽培対比		
		2005	2006	2007
百分比	平均	121	121	94
	最大	-	152	127
	最小	-	92	77
場所・品種数		1	4	11

注)同一場所・品種ごとにTDN収量の比を算出。
05年;温暖年、06年;温暖寡照年、07年;高温多照年。
07年に指数77を示した品種は極早生ではありません。

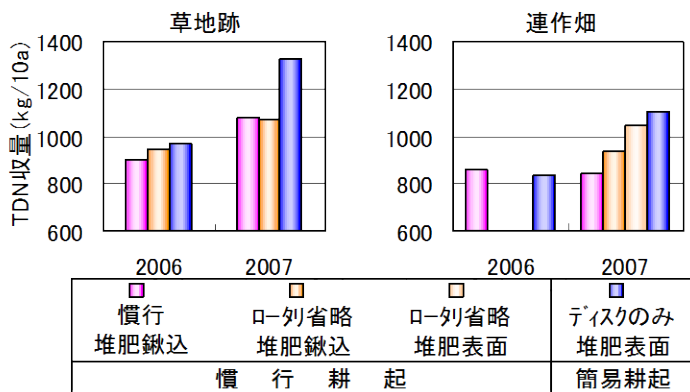


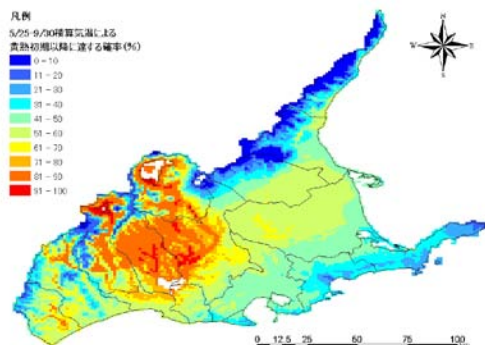
図. 播種床造成法別の収量

地区別に栽培可否を検討

1kmメッシュ「黄熟初期以降に達する確率マップ」を作りました。パソコンを使って、畑ごとに情報を検索できます。

右図. 黄熟初期以降に達する確率マップ
農業環境技術研究所清野裕が作成したデータおよびアメダスデータのメッシュ化システムを用いた

このマップは、関連するデータとともに、パソコンで自在に閲覧できる形でCDに入れ、希望される方々に配布いたします。



根釧農試 研究部 作物科
 住所 標津郡中標津町旭ヶ丘7番地
 電話番号 (0153)72-2004
 e-mail: seika@agri.pref.hokkaido.jp